

資料 千号演習と高城飛行場 1

資料 1 鳥取地区司令部の設置（『鳥取県史』近代政治篇 p432）

大本営は本土決戦に備えるための「決号作戦準備要綱」を示達（20年3月20日内示・4月8日示達）。作戦・兵力運用・国内抗戦・国内警備・交通・通信・兵站などの諸計画を盛り込む。3月から6月にかけて、軍事特別措置法、義勇兵役法、戦時緊急措置法などを公布。これにより、土地・建物・工作物などの管理・取用・使用・移転・除去・禁止・制限・業務協力・損失補償などが可能となり、軍事と行政との一体的運用を図るため、同要綱に基づき 20年4月に鳥取第一中学（現鳥取西高内）に「鳥取地区司令部」を設置

資料 2 『鳥取県史』近代政治篇 p634

「千号演習」

本土決戦の声と共に五月七日から県下一斉に「千号演習」が始まった。松根掘りと共に戦争末期強制された勞力奉仕である。中国山脈の山腹を中心に、コの字型の狙撃陣地・一人用の蛸壺・物資弾薬貯蔵庫など、合計五百六十の横穴や壕が掘りかえされた。十月完成を目標に米子・倉吉・鳥取の三地区を中心として、各町内・部落が総動員され延五、六十万人がこの作業に従事したが、鳥取地区では予定の三分の一、米子は五分の一、倉吉が一番進んで八分通りは出来上がって終戦を迎えた。この賃金は終戦後も支払われず倉吉地区だけで二十万円（男二円、女一円五十銭が日当）に及んだという。そして落盤事故で死亡四、重軽傷十六人の犠牲があった。（社会 728 参照）

資料 3 大阪毎日新聞鳥取版 S21.08.11

「空費した人力と物量 甦る“ち号演習”の想出」

戦争が儲からぬものかどうか大きな損失であることを示したものの一つは”ち号演習”であった。当時は”秘密、秘密”で地区司令部、義勇隊本部員以外は誰一人としてその内容が分からぬままに五月初めから山中に引っ張り上げられ軍人の監督の下に鶴嘴や鍬を持たされては無理に掘らされた地中の壕ーコの字型の狙撃陣地一人居りの章魚陣地、物資弾薬貯蔵庫など合計約五百六十、中国山脈の山腹を中心に鳥取、米子、倉吉の三地区に分けて当時の地区司令部の指揮で行はれたのがち号演習の正体、何分昨年の八月十五日敗戦の午前六時関係書類は全部焼却されたため今なほはつきりした全貌が分らぬが着手したのが五月七日、十月完成の予定で動員人員は五、六十万、この経費は大体百五、六十万円、結局予定通り進まず鳥取地区が三分の一、米子地区が五分の一、倉吉地区が最もすんで八分通りのところで敗戦となった。おまけに男二円、女一円五十戦坑道夫十五円の賃金も敗戦のどさくさに軍は金額を払はず倉吉地区だけでも約廿万円が未払ひとなつた、しかも落撃のため死者四名、重傷者六名軽傷者十名の犠牲者を、山林所有者は山は荒らされ折角の植林も潰されて泣き寝入り、敗戦後壕は潰されることになり資材は地元町村民へ払下げられたが結局一文に

もならず馬鹿をみたのが“ち号演習”であった。（写真は夏草茂る壕の入口）

資料 4 国民義勇隊参加への決意表明の賛同を求める請願 S20.04.01（『勤労義勇隊千号演習出動人名簿』外江村役場）

黒田藤重（県議会議長）
松本政一（鳥取県教育会代議員）
大政翼賛会各郡市町村支部長殿
各郡市町村翼賛壮年団長殿

戦局ノ危急ニ処シ政府ハ国民義勇隊ノ結成企図ヲ発表セラレ候処、我等ハ該組織ヲ最後ノ切札ト存候ニ付テハ結成指示ニ先ンジ五十万県民ノ赤誠ヲ披瀝シテ欣然コレニ参加スベキ決意表明ノ誓ヲナスト共ニ該組織ヲシテ遺憾ナク実力ヲ發揮セシムル為、政府ニ於テ速急施策相成度件ヲ併セテ上■請願致度候条右御賛同相成、貴区内男女ノ別ナク広く純忠ノ志ニ愬エテ成シ得ルダケ多数ノ署名捺印ヲ急速ニ取纏方御尽力賜度、誓願書案相添エ此段及御依頼候也

追而署名捺印取纏メハ然ルベキ方法ヲ以テ急速ニ行ヒ来ル十五日迄ニ大政翼賛会鳥取県支部宛御送付相成度、署名用紙ハ半紙判トシ適宜御調達被下度候、捺印ハ拇印ニテモ宜敷候（誓願書 略）

資料 5 勤労義勇隊動員に関する通知 S20.04.26（大政翼賛会鳥取県支部長から各郡市町村支部長あて、同前）

- 勤労義勇隊動員ニ関スル件
第二次千号演習実施ニ関シテハ既ニ着々其ノ準備相煩シ居リ候事ト存候處、愈々実施期日モ切迫致段候ニ付別紙要綱充分御諒得ノ上萬遺憾無キヲ期セラレ度候
- 勤労義勇隊幹部集合ニ関スル件
別紙勤労特攻隊（※義勇隊の誤り）動員要綱ニ依リ第二次千号演習実施ニ當リ左記ノ通り三地区ニ区分集合シ演習上ノ指示説明有之候ニツキ貴支部内中隊長（未決定ノ場合ハ中隊長タルベキ適格者）一名又は二名派遣相成度
- 追而本演習中最モ重要ナルニツキ必ズ参加セシメラレ度申添候

		記	
地区別	集合範囲	日時	集合地
東地区	因幡一市三郡	五月六日 午前十時半	千代橋下流千代磧雨天ノ際ハ富桑国民学校
中地区	東伯郡	五月四日 午前十時	小鴨橋磧雨天ノ際ハ明倫国民学校
西地区	米子市西伯郡 日野郡	五月三日 午前十時	巖国民学校

（ここから★まで S20,05,18 通知末尾に綴り混み）

- 「勤労義勇隊動員要綱」
 - 趣旨

今や皇土は沖繩、ルソンに直結する戦場となり、戦災は愈々身辺に迫ってきた。吾等の血潮は祖先の伝統を承け一切を擲ちてひたむきにこの難局に挺身せんとす。時に第二次千号演習の実施せらるゝにあひ、県民挙り起ちて忠誠心をたぎらせ勤労義勇隊を組織動員し、協■戮力神明より相伝へ三千年の歴史を生めるこの神州を護持する為、聖鍬を振り鉄桶の護を築かんとす。尚これによりて政府に於て結成を期待せる国民義勇隊の精神的基盤を錬成せんとす。

- 動員
 - 動員範囲
 - （1）十五才以上六十五才迄の男子及び十五才以上四十五才迄の女子とし年令超過せるものと雖も気力旺盛身体強壯なるものは参加すること。
 - （2）左の一に該当するものは之を除外す。
 - （イ）技能者として県勤労課より動員せられたるもの
 - （ロ）本演習に直接関係ある管公吏
 - （ハ）病弱者、妊産婦及び乳幼児を保育する者
 - （ニ）其の他県支部長の定むる所に依り市町村支部長に於て動員不適當と認むるもの
 - 動員期間 二十年四月下旬至全六月末
 - 動員場所 県内東、中、西ノ三地区
 - 動員員数
 - 毎日一般土木作業者約七千名、運搬作業者約 二千名但シ県勤労課より動員せらるゝ特技者はこの外とす。
 - 動員方法

- （1）市町村支部長は所轄国民勤労動員署長と協議し、上級動員本部の指令に応じ所定の員数を所定の場所に集合し得る様整備し置くこと。
- （2）勤労義勇隊は市町村を一単位とし市町村名を冠せる○○勤労義勇隊と称し、部落会、町内会等の区域に応じ約三十名（此の数は本演習実施上野作業単位員数）を以て一ヶ班とす。
- （3）市町村支部長は班の数に応じ小隊、中隊を組織し夫々班長、小隊長、中隊長を在郷軍事翼賛壮年団員等中の適格者を以て選任すること。

- 6 動員本部
 - （1）県及び地区、郡、市に動員本部を設置す。
 - 県本部は大政翼賛会県支部事務局内に置き、県下に於ける本演習に関する一般勤務義勇隊員の動員及び各地区及び郡市町村との動員に関する連絡、統制、指導に当る。県本部に於ては一般国民勤務動員に支障無からしむる様、県勤労課と常時緊密なる連絡するものとする。地区本部は東地区大政翼賛会県支部、中地区全東伯郡支部、西地区全米子市支部に置き当該演習実施地区に於ける動員に関する連絡指導にあたる。郡市本部は大政翼賛会郡市支部に置き

郡市内に於ける動員につき連絡指導にあたる。
（2）動員本部の機構については別に之を定む。

- ★
 - 三 作業
 - 1 工事は総て軍の指導により軍の作業軍規に準拠して作業す。
 - 2 作業は隊員引続き三日以上連続作業をなすを原則とすれども、遠隔地より参加するものにつきては特別に取扱ふことあり。但し幹部は引続き勤務することあるべし。
 - 3 作業器具は指示せらるゝものを各自携行するものとす。作業器具なきものにつきては其の市町村に於て調辨すること。
 - 四 宿舎
 - 1 遠隔地より参加し通勤し得ざる隊員の為、作業地の寺院、集会所、民家等に宿舎を設く。但し食糧寝具等は各自携帯すること。
 - 2 宿舎に宿泊せんとする町村は三日前迄に地区動員本部に申出、指揮を受くること。
 - 五 給與其他

- 1 旅費其の他の給与は軍に於て定められたる額を支給せらるゝ予定なり。
- 2 個人的の補償は演習の趣旨に鑑み受けざるものと考へられたし。但し、出動人員、年令等を勘案し、纏めて其の市町村に軍所定の給与を支給せらるゝものとす。
- 3 作業中事故による傷害につき軽微なるものは特設救護班及び地方医療施設を充当して手当を行ふも、重患は陸軍病院を使用して手当をなす。不幸死亡に際しては軍に於て所定の取扱をなさるゝ予定なり。

- 六 其の他

- 1 本要綱は緊急市町村常会並に部落会町内会の緊急常会を開催しこれの徹底を図ること。
- 2 隊員は各自概ね横六糎縦十の白布に○○町村勤労義勇隊と記せる標識を左胸部に附すること。

資料 6「勤労義勇隊幹部集合場所変更ニ関スル件」 S20.04.30（本文略）

		記	
地区	集合場所	日時	集合範囲
東地区	稲葉国民学校	五月六日 十時半	1鳥取市ノ内稲葉、中郷 2岩美郡ノ内倉田、米里、津ノ井ヲ除ク十四ヶ町村 3八頭郡全町村
東地区	東郷国民学校	五月六日 十時半	1鳥取市ノ内稲葉、中郷ヲ除ク他 2岩美郡ノ内倉田、米里、津ノ井 3気高郡全部

資料 千号演習と高城飛行場 2

西地区	成 實 国民学校	五月三日 午前十時	1 米子市ノ全校区 2 西伯郡ノ内成實、天津、大國、法勝寺、東長田、上長田
全	大 幡 国民学校	五月三日 午前十時	1 日野郡全部 2 西伯郡ノ内太幡、大高、幡郷、賀野、縣、尚徳、手間、五千石、春日、巖
全	宇 田 川 国民学校	五月三日 午前十時	1 西伯郡ノ内右ニ会場以外ノ各町村（汗入各町村及び日吉津、大和、弓濱各町村）

備考
（一）西地区ニ於ケル作業就労ニ関シテハ境町災害復旧ト脱合セ適宜変更スル予定ナリ。
（二）右会合出席者ハ各町村ニ於テ（市ニアリテハ校区毎単位）本動員ニ関シ作業現場ニ引率配置ノ統制ヲトルベキ適格者一名又ハ二名トス。

資料 7 「ち号動員作業ニ関スル件」S20.05.18（義勇隊西伯地区本部長中村民雄発各町村支部長あて）
標記ノ件ニ関シテハ種々御高配ヲ賜リ御蔭ヲ以テ着々工事モ進捗中ニ有之候へ共本日宇田川、成実、大幡各作業隊長ヨリ左記ニ関シ各町村出動ニ関シテ御依頼有之候ニ付、事状御了察ノ上作業ノ進捗ヲ計ル為一段ト御協力賜リ度御依頼申上候也

記
一中隊長ハ杓クトモ一週間位ノ同一人継続出動願フコト（二三日交替デハ連絡及作業上ニ関シ能率が上ラナイコト要スレバ隊長ハ郷軍分会長、分副会長、翼壮団長、警防団長、全副団長其他適格者ヲシテコトニ当ラシムルコト）尚交替ノ際ニハ次ノ中隊長ニ書面ヲ以テ作業ニ関スル隊長ノ指示其他一切ノ引継ヲナスコト
二作業場ニ於ケル規律、作業ニ対スル熱意、風紀其他一切ノ事ガ各町村中隊長ノ熱意ニ依リ隊員ノ気持並ニ作業ノ遂行ニ重大ナル影響ヲ及ボス事ヲ充分御考慮ノ上中隊長ニハ型的ナ一切ノ事ヲ避ケ真面目ナ方ヲ銜膺相成様特ニ御配意相成度キコト

資料 8 千号演習勤労義勇隊動員経費請求ニ関スル件」S20.06.05（大政翼賛会鳥取県支部・勤労義勇隊動員本部発市町村支部勤労義勇隊動員本部長あて）
第二次千号演習鳥取県連絡本部ヨリ通達有之候ニ付左記様式ニヨリ第二次千号演習実施勤労義勇隊動員日当夫々郡支部經由（市ニアリテハ県支部宛）請求書本月六日迄に御提出相成度候

猶本期間中他ノ軍作業等ニ出動セルモノアル場合、千号演習ト同一視シ記入スルガ如キコトナキ様セラレ度
記（様式）

請求書
一金 也
是レハ 自 月 日（実施ノ初日ヨリ）至五月三十一日
但シ内訳左記ノ通り
内訳

名称	延人数	単価	金額	動員月日	出動先	摘要
勤 労 義 勇 隊日当	男名 女名	男 2,00 女 1,50				
全						

計
右人員ハ本市町村備付ノ勤労義勇隊出面簿ノ照合ニヨル右ノ通請求候也
年月日
鳥取県 郡（市） 町村長
鳥取地区司令官 殿

資料 9 勤労義勇隊動員請求書 S20.?.?（鳥取県西伯郡外江村長古濱巖発鳥取地区司令官あて）

請求書
一金千七百九拾參圓五拾銭
是レハ 自五月十日至五月三十一日 二十二日間勤労義勇隊動員日当
但シ内訳左記ノ通り
内訳

名称	延人数	単価	金額	動員月日	出動先	摘要
勤 労 義 勇 隊日当	1010	男 2,00 女 1,50	1793,50	自 5 月 10 日 至 5 月 31 日	成実村	

計
右人員ハ本市町村備付ノ勤労義勇隊出面簿ノ照合ニヨル右ノ通請求候也
昭和 20 年 月 日
鳥取県西伯郡外江村長 古濱 巖
鳥取地区司令官 殿

資料 10 第二次千号演習勤労義勇隊出動表 S20.06.06

・表欄外に「△印は半島人」の記述あり
・6月6日藪内節雄（中隊長）ヨリ報告
ツルバシ 大2本 小2本
スコップ 2本
ゲンノ 1本
クワ 1本 6月6日申送り

資料 11 横枕の千号演習（『横枕記』S52、県立図書館蔵）

「千号（地壕）演習」
村下の道祖神附近一帯町の様な賑さが五ヶ月もあつたと云つたら冗談を云ふなど笑はれるかも知れない。併し事実あつたのだ。是が八丁山を中心とする千号演習で戦争末期の一余波である。（略）

この忙しい中に「どうやら八丁山を中心に海岸から上陸して来る敵を激撃する穴を土中に掘るのだそうだ」との話で矢継早に三月の終り頃道祖神付近に馬車で松材を運搬して来だした。厚い松板、太短い丸太を何処からとも知れずどんどん運んでくる（馬車は全部統制されてみた）其の中に大工らしい者が来て此の板でバラックを建て始めた、村役場から始めて千号（地壕）演習があるとの村觸があつて出席は誰々場所は八丁山頂を少し下つた三谷の頂と云ふことである。区長は森本靄蔵であつた。此の粗末なバラックが急に県道の天王谷側つまり入口を東にして道祖神より安田の若島の塚の所まで建てられ、徴用された大工、建具屋、素人大工、巧者な大工の真似をする者まで含めて約九十名程毎朝一番の自動車でやって来る。直ぐに係の兵隊が来て、点呼をとつて作業開始。同じ自動車で鳥取市庖丁人町義勇隊と白地に大書した旗を戦鬨に年寄婦人が胸に名札をつけたのが隊伍整然としてやって来て天王谷に這入る。手にスコ或は鎌、唐鋏、鶴嘴を持って居る。之をもって穴を掘るのである。続いて鹿野町が戦鬨帽をかむつた男先生を先頭に小天王谷に入る。勝谷、小鷲は岩崎橋の上、翌日は又交替して来る。或は鳥取市の如きは町が交替して来る。岩美郡からも来た。岩石が多いので爆発物を使ふ。八丁山中心の千号演習の総責任者は岩美郡出身の井上少尉殿で始終巡視をされる。本拠は東郷村にあつたらしく朝早く一同勢揃いして八丁山に向ふ頃には神戸は立岩谷の穴に向ふべく到着してゐる程の精勤さである。

五月十四日から七月三十日迄老人も女の真剣必死であつた。兵隊に教へられた通り鶴嘴でコツコツ交替で掘つた。兵隊に煎つた豆を土産に持って登山する。自分の子は孫は本を抱へてお宮に避難して勉強する。錯雑した精神状態でもあつた。重い分厚い板を有富谷から長い間かゝつて担ぎ揚げる、掘つた穴に是をはめ込むのである。向い側でも掘つてみた。一組の中の一人は上から石がドッサリ落ちて病院に運ばれたが間も無く息が絶えたとのこと。

斯くして掘つた穴は全部抜け穴になつてゐて外側は石で囲い偽装として樹木を植えた場所は八丁山頂、立岩谷のものは村中総林の頂上に一つ本城の裏に一つ（主に土で掘易かつたと神戸の人は云ふ）向山の裏から山下の裏へ抜ける穴（主に岩石で爆薬を使用した鳥取市の人々が掘つた）、小天王谷から天王谷堤の南に一つ（主に堅い岩）、天王谷堤西北から堤の直ぐ前方（主にもろい赤い岩）、共に火薬を使用して牛が走つたこともある近藤の背戸や市部を掘る測量をしたが着手せずに終戦を迎へた。

一応は掘り方に成功したが終戦後之を取壊す命が降り、板は各自取り穴は現在の如く破壊して仕舞つた。最大のものは三田地蔵裏の穴である。

終戦前夜とも言ふべき昭和廿年の区長日誌（森本靄蔵氏のもの）をやゝ精しく書き写して此の小部落の横枕への波及を記して参考の資としよう。
（以下、区長日誌に千号演習関係記事あり 省略）

資料 12 東郷村の千号演習（『東郷郷土誌』S47、県立図書館蔵）
「ち号演習」

昭和二十年四月、太平洋戦争も末期となると、戦い我に利あらず、遂に本土決戦を待つばかりとなる。この頃表日本の防衛は殆んど完備されていたのに反し、裏日本は全く手薄の状態であつたので、これに乗じて敵軍が上陸を企図する公算が大であるとの想定の下に軍はち号演習と号して、県内では東・中・西部の三地区の要所要所に陣地を構築することになつたのである。ち号演習とは防諜上の述語である、

東部地区では当地区と百谷の山地が選定される。四月二十四日、鳥取四十七聯隊より連絡のため來村、同月二十七日から二ヶ月の予定で演習実施につき、宿舎、食料、燃料の斡旋をたのむという。そこで宿舎に小学校三教室を提供することにし、薪、魚、野菜（一日二重貫）の配給を行なうこととなる。翌二十五日、部隊より先発隊二十名到着、宿舎などの設営を行ない、県衛生課は宿舎内に救護班を設置する。二十七日、大岡少尉を隊長とする本隊一二〇名（内工兵十五名）到着、直ちに演習に入る。就労人員は一日一、三〇〇人で、郡内は勿論、鳥取市、八頭郡方面からもバス（木炭車）で続々送りこまれた。本村でも勤労義勇隊（男女四〇〇名跡四二〇名となる）を組織し、五月七日から就労する。

この地区の演習地は、今在家神谷、北村惠儀谷、中村扇谷及び八頂山の山頂から山腹にかけての四十三ヶ所で、陣地構築は二米四方の洞窟だが、中には貫通するものもあつた。末口二十糶、長さ二米の丸太を鳥居組とし、両側と天井を生松の厚板で囲い、落盤を防いだ。

この陣地も完成を見ずして終に終戦を迎え、今尚醜い傷跡を残している。

資料 千号演習と高城飛行場 4

資料 23 秘匿飛行場一覧（S21.12「本土航空作戦記録」国会図書館蔵）

付録第三「本土航空施設ノ梗概」

第二節 航空基地整備状況

四 昭和二十年四月以降の状況

昭和二十年四月に入るや硫黄島敵手に入り沖繩又敵の侵す所となるに及び本土決戦の機会々近きを思はしめ敵の本土上陸迄航空戦力を絶対確保するの要切なるものあり

一方 B-29 及艦載機の攻撃逐次熾烈となり航空機の生産低下するのみならず完成機も漸減するの状況にして敵の本土上陸迄訓練を犠牲とするも現有機を絶対確保するの施策を要するに至れり

之が為重要施設の地下移行を理想とするも資材及労力之を許さざる為燃料弾薬は洞窟内に収容する他、飛行機は取敢へず飛行場周辺の地形地物を利用して分散秘匿することとし（別紙第三参照）各部隊に対し一斉に之か実施を指令せられたり

以上諸施策の徹底により六月末頃には敵艦載機の猛攻下に於ても損害を減少し概ね持久態勢を確立するを得たり

右の如く分散秘匿せる飛行機を戦機に投じ飛行場に運搬し発進せしむることは甚だ困難にして敵の制空圏外になる場合に於ても最小限四時間を要し敵の制空時に於ては夜間以外飛行機の運搬不可能にして攻撃時機は払暁と限定せらるるに至り敵機動部隊を好機に投じ攻撃し得ざるは必然なり。之が欠点を打開する為には飛行場それ自体を秘匿せざるを得ず。而して広大なる飛行場を敵に発見せられずして建設する為には地形特に有利なるを第一条件とす。之が為有ゆる機関及部隊を動員して適地を調査すると共に秘匿飛行場の構想（別紙第四参照）に各作業部隊の創意を凝し四月以降左記飛行場の工事に着手せり

東北方面 三本木、六郷、金ヶ崎、水澤、王城寺、棚倉
関東方面 矢板、結城、真壁、御勅使河原、今市、龍ヶ崎、熊谷、北富士
北陸方面 八色原、新潟、村松
東海方面 関、大垣、菰野、鈴鹿
中部方面 粉河、神野、青野原、福知山
中国方面 行幸、倉吉、殖生
四国方面 丸亀、国分、松山
九州方面 津屋崎、福島、山鹿、飯野、小林、甘木、人吉、熊本、豊後

各作業部隊は秘匿飛行場の重要性を痛感し鋭意之か完遂に努力せる結果七月末には概ね使用可能の程度に概成せり以上分散秘匿の徹底と秘匿飛行場の完成により一応本土決戦に応ずる基地態勢を確立せり

資料 24 日本海沿岸への兵力派遣（S26.12「本土地上防空作戦記録（中部地区）」国会図書館蔵）

第二編 作戦

第三章 情勢の推移に伴ふ他地域への兵力派遣並に其の戦闘

第八節 日本海沿岸山陰諸港への兵力派遣

七月満洲より北鮮を経由し大量の大豆、日本海沿岸山陰諸港に入港することとなる。当時国内食糧事情は逼迫し、辛うじて保持し在りし大陸一裏日本航路も日本海への敵潜水艦の侵入と敵機の本土制空により危殆に瀕し満鮮に依存する食糧充足も今後を期待し難き状況なり

方面軍は本輸送を決戦輸送と称し頗る重視せり

師団は之が揚陸を援護する為先に米子飛行場掩護の為同地に派遣し在りし高射砲一小隊を急派し更に掩護地域の焼失により比較的重要度の低下せる大阪北地区隊より高射砲三中隊を抽出し之を其の揚陸港たる仙崎、萩附近に派遣し師管区部隊長の指揮に入らしむ

本揚陸作業は敵機の妨害を受くることなく完了せり。此等派遣部隊主力は七月末より八月初旬に互り逐次広島市に、一中隊は防府市に転進せり。

資料 25 『米軍の写真偵察と日本空襲』（工藤洋三、2011）

作戦名称	日付	目標地域	内容
5M139	4/13	中国地方の日本海側海岸線	津島海峡と仙崎、浜田、松江、境港、米子、宮津、舞鶴などの日本海側の都市を撮影
5M316	7/5	本州西部	好転下、高松市街地の損害評価用の写真を撮影、佐伯海軍基地、宇佐飛行場、高松飛行場、岡山飛行場、松江水上機基地、湯町水上機基地などの写真を撮影。仙崎、萩、松江の日本海側の都市、岡山、徳島なども撮影
5M346	7/22	三原、本州北部海岸、大阪	7/10 の雲量で和歌山市街地の損害評価（空襲）のための写真撮影。下津、三原、堺の船舶、佐野、美保、鳥取などの飛行場に駐機した飛行機を観測
5M381	8/6	松江、岡山	倉吉飛行場、豊浜の未確認飛行場（観音寺飛行場）を写真撮影、8 時 17 分に呉地域で爆発を観察。2 本柱が 35000 フィートまで上がる。

地区	出典	地区名	記述概要
東地区	岩美町誌（S43）p419～421 <p>新編岩美町誌（H18）p956</p>	山湯山、百谷、久松山等	6月9日と6月25日に演習出動の記録
	新編福部町誌（H12）p732	百谷	7月30日早朝、グラマン戦闘機数機が岩美駅上空を飛来。「千号演習」のための集落の人々に、機銃掃射をくわえ2人の死者が出るという惨事が起こっている。
	若桜町誌（S57）p500	久松山、百谷	20年5月頃から、百谷まで村単位で動員された。福部村だけでなく、小田・本庄の人も加わって行った。高小卒の女子は看護班だった。百谷では兵隊さん2・3人いて、指揮をとり、幅約2～3メートル、高さ2メートル、深さ8メートル位の横穴を掘り、杉丸太や坂で土砂崩れを補強した。今思い出しても、その場所が不明である。鳥取の方からも来ていて、横穴は10以上もあったと思う。本土決戦の声とともに県下一斉に行われたものに「千号演習」がある。戦争末期に強制された労力奉仕の一つであるが、労力を割当てられた者は朝早く役場前に整列し、それぞれ行き先をきめられた汽車に乗って鳥取へ出る。鳥取では若桜町の担当であった久松山から百谷方面へかけての山々に、狙撃陣地や物資弾薬貯蔵庫などの穴を掘るといふものであった。作業の始まる前には分隊長が「護国の英霊に感謝し誠をささげ、一千の将兵の武運長久を祈る」というようなあいさつをして仕事にかかる。作業は、男女一組になって「モッコ」で掘り出された土を林の中に運んだり、伐り倒された松の木の厚板を掘っている穴のところまで運ぶというようなことが主であった。この千号演習には女の人も多く動員されていたが、妊娠している人や子どもが一歳未満の者は除かれていた。
	用瀬町誌（S48）p665		昭和20年、敗戦が濃厚となった夏を迎える頃、食糧も衣料も底をついていたが、鳥取方面に敵が上陸するのに備えるため、千号演習と称して防空壕掘りが始まった。婦人といわず老人と問わず、銃後のすべての人が動員されて汗をしばり、終戦の8月15日の日までこれが続いた。
	新修気高町誌（H18）p439	横枕、高路	本土決戦の声とともに昭和20年5月7日から10月完成を目標に、元氣な主婦たちを中心として軍の命令のもとに秘密裡にトラックで駆り出された。気高郡内は、鳥取市奥の横枕や高路方面の山ずそであった。コの字型狙撃陣地や一人用タコツボ、物資や弾薬などの貯蔵庫を造ろうというもので、モッコ・シャベル・ツルハンなどにより大きな横穴を掘り、上から土砂が崩れないように松材などで木枠を組みながら進められた。一般の人々のほか学生の一部も測量の手伝いをさせられたという。三分の一も出来ないまま終戦を迎えた。
鹿野町誌下巻（H7）p86	横枕（ギ号演習として佐谷峠の道づくり）	本土決戦に備え、千号演習の名のもとに元氣な者は男女を問わず軍の指示により穴掘りに駆り出された。当時は何の目的かは知らされないで、上からの命令指示に従うだけであった。作業は山の斜面に大きな横穴を掘り、上から土砂が崩れ落ちないように木枠を組みながら奥深く進んでいった。鹿野町域からは鳥取奥の横枕方面に中年男子や婦人がトラックで作業に行った。作業は山腹に底辺3メートル、高さ2.5メートルくらい大きな穴を掘り、木の枠を組んで奥深く入っていくものであった。終戦後明らかにされたのは、コの字作戦といつて實露方面に上陸した敵兵をこの谷の奥深くにおびき寄せ、両面と正面の三方の穴から攻撃を仕かけるというものであった。なおギ号演習といって小鷲河村の人を主に鹿野町・勝谷村からも、佐谷峠の道づくり等にも出かけていた。	
中地区	新修倉吉市史		（県史に依拠した記述）
	羽合町史後編（S51）p672	馬ノ山の遠見山、打吹山	幾分でも働けそうな残残り男子に「千号演習」と称して、馬ノ山の遠見山や打吹山山腹に防空壕を掘らせたり、倉吉市横田に飛行場をつくるために動員した。この「千号演習」は、動員の呼び出しがつかれば自分らの仕事を中止し、在校軍人監督のもとにきびしい夜間作業をしたり、敵戦車上陸に際してその車輪に竹や棒切れをさしこんでその進行を妨げる練習をするという笑うに笑えぬ真剣できびしい訓練であった。
	東郷町誌（S62）p458	倉吉市小田山	千号演習とは、戦争末期の労力奉仕のことである。本土決戦に備え、山腹などに狙撃陣地や物資貯蔵庫などを造るために横穴掘り、資材運び、あるいは倉吉市高城の飛行場整備などに各市町村から多くの人が動員された。『立木柳蔵日記』によると、当地からも昭和20年5月から7月にかけて、合計8回、千号演習に出掛けている。その多くは、倉吉市の小田山での坑道掘り（築塞）であった。当時、東郷村・松崎村組合役場の助役であった立木は、自ら村民を引率して千号演習に参加している。参加者は第3回100人、第7回80人などと記録される。しかし、これらの作業は空しい労働奉仕であった。間もなく終戦を迎えたため、飛行場などはいずれも無用となったのである。
	三朝町誌（s40）p372	打吹山	「千号演習」といって高城の飛行場の設営、倉吉打吹山の塹壕掘り、穴鴨余川山に美保航空隊の製炭作業の出役など、主食として配給されたバレイ薯や大豆の弁当を持ち、栄養失調に近い身体で、戦局の前途に不安を感じながら頑張り続ける日々であった。
	新修北条町史（H17）p652	米里三ノ崎（通称鷹ヶ平）（曲字北亥ノ目山と東谷の松を伐採）	町内では、米里三ノ崎の通称鷹ヶ平に漆をめぐらした迎撃陣地、銃を据える位置に20センチ四方へ穴を開け、旧県道（今の町道米里北尾線）が眼下に見渡せることができるように設計されていた（田村志伸談）。曲字北亥ノ目山と東谷の松が殆ど伐採された。動員された男性が木の伐出し、女性は土運びが主要な仕事出会った。（平林博行談）
東伯町誌（s43）p425	北条と倉吉の境の山（小田山？四王寺山？）	戦争が苛烈になった19年からは、千号演習というものが始まった。銃後に残った国民を、各戸に割当てて特出し、地方の戦闘設備のための作業に当らせたのである。当地方の人々は、主として高城の飛行場作りと、北条と倉吉の境の山の塹壕掘りに当った。夏の暑い日、配給のじゃがいも弁当を掲げて、毎日黙々とその作業に当たったものであったが、どちらも十分完成せぬうちに終戦となった。	
西地区	米子市史近代p75	成実村、幡郷村越敷山	国民義勇隊の実際の活動は「千号演習」と称する周辺地区での陣地構築、物資・弾薬貯蔵庫造成。尚徳村役場「ち号演習出動表」によれば時期は5月28日～8月上旬。のべ男1431人・女1763人。日当男2円・女1.5円。隊長30名・隊員男262名・女288名。
	会見町誌（S48）p402		19年になると千号演習に日の丸弁当さげて、酷暑の夏の日でも黙々作業に懸命であった。
	岸本町誌（S58）p420	越敷山、高塚山 <p>境町（島根半島）、大山・淀江（福吉）、幡郷～南部（成実）、八郷（越敷山）</p>	岸本町付近では越敷山、高塚山中心に作業が行われた。今でもこの山の山腹にはその壕穴の痕跡が見える。越敷山付近には主に日野郡各町村の義勇隊が動員されていた。この作業中溝口町の岸本昌、山口正男両氏が落盤事故の犠牲者になっている（『溝口町誌』） <p>当町の大幡村義勇隊は大部分宇田川村西原（いま淀江町）壺瓶山の山地に動員されそこで作業中、吉定の岡田橋次郎は不運にも土砂崩壊のため尊い犠牲者になられたのであった。同氏の子二人とも大陸において既に戦死させられ、一家三人目の不幸、合唱冥福を祈るほかない。</p> <p>西伯郡義勇隊の動員状況は、あらまし境町の人は船で島根半島へ行き、大山村や淀江の人は福吉周辺の山腹に、幡郷から南部地区は成実の山へ、当時日野郡八郷村の割当は越敷山で、日野郡隊長加藤直（米沢村）、副隊長池田馨（二部村）の指揮で、毎日立岩の三和橋を渡って小町坂から越敷山へ往復歩いた。S20.7当時境港の米子地区司令部にいた諸田良氏の証言によれば「弓浜半島に米軍上陸を想定し、皆生を結ぶ線に迎え撃つ、敵が本土深く入ってくる。その時越敷山を中心とする台地に敵を引きつけ、宇田川の高麗山と米子市成実の山から包圍殲滅作戦を展開する」作戦であった。</p>
	日吉津村誌上巻（S61）p795		日吉津村役場は海岸地帯の防風林の伐採を許して防空壕を築造さす。
	大山町誌（S55）p596	宇田川山地、長砂の飛行場物資の集積作業、淀江町高井谷南方の壕築造作業	内地の軍事施設づくりの作業で、命令の最高出所はわからなかったが、町村では役場の本部長から、各村々の長や婦人会長に出動の日時、人員、場所が連絡され、村の責任者は指示どおりに人員を整えて、出動させる仕組みで、命令系統も確立されていた。
	淀江町誌（S60）p686	越敷丘	所子部隊は大部分が、宇田川山地と米子長砂地区の作業に出動した。当番が回ると、弱い母をいたわって娘が、疲れた妻の代わりに老いた夫が出動した。妊婦や乳児持ちの母は免除されたが、母の代役を勤めて、上野路切の米機襲撃の犠牲となった娘たちがあって、涙をさそったが、村内でも家庭でも、互いこいたわり合い代わり合って役目を果たした。
	日南町誌（S59）p244	越敷山	毎朝、現地近い淀江駅から作業隊の長い列が、宇田川山地に向って続くのが見られたが、父をなくした女だけの家庭にも、出動の役目は回り、「勝つ日までは」と誓う言葉も、どこか空虚な響となりながら、穴掘り千号演習がつづいた（池田重道の手記）
日野町誌（S45）p597	幡郷地区	昭和20年になると美保湾からの米軍上陸作戦に備えて、島根半島や、淀江一帯の丘陵地帯から会見・岸本町の境にある越敷山にかけて無数の横穴が掘られた。作業は老若男女を総動員して連日行われ、つらい作業が続いた。	
江府町史（S50）p651	幡郷村越敷山	奥日野の担任は岸本地区で、日本海から夜見が浜、淀江地区に上陸した敵が、日野川にそって南進するであろうという想定で、米子平野の前進地点で抵抗し、しだいに八幡、蚊屋の線から幡郷、岸本の盆地にひき入れ、日野川の地隙の隘路口で、決戦をするという計画で、防禦陣地になれない日本軍が、採用した縦深陣地の構築である。現在の「こしきが丘住宅団地」附近につくったのがそれである。総武兵団（230師団）の師団司令部が、一時ではあったが、根兩國国民学校におかれ、根野の倉庫が一度に軍国色に塗りつぶされるという予想もつかなかった情景が演ぜられた。狙撃陣地・掩体壕・一人用砲壺壕・弾薬庫・倉庫等の構築作業だったが、ちょうど梅雨の季節で、雨の中の作業で苦労が多く、落盤事故で怪我をしたり、一命を落した者もあつたぐらいである。雨合羽などもなく、蓑とタコソコバチというてちで、汽車に乗って岸本まで出て、それぞれの部署について作業をしたわけであるが、持物から服装、百姓一揆を思わせるものがあつた。	
溝口町誌（S48）p744	越敷山付近	千号演習として西伯郡幡郷地区の陣地構築に、郷土の人々は次々に動員され作業に従事した。現岸本町、当時の幡郷村越敷山に出かけたが、動員可能な残存労働力はほとんど主婦であったため、婦人会の業といつてよいものであった。5月4日から、スコップやツルハンで土石を掘り、モッコで運ぶという重労働が6月末まで続いた。7月も予定されていたが食糧増産のため中止となった。	
		本土決戦などのための竹槍訓練が始まると、時を同じくして敵の本土上陸に備えて、防禦陣地の構築がつくられることになった。これを千号演習と呼ばれ、日本海に面する山地に狙撃陣地や、たこ壺、弾薬や物資貯蔵用の横穴などを掘る作業であった。当時この地方の町村に割り当てられた作業場所は、今の会見町越敷山付近で、各町村毎に動員されて終日作業に従事した。この作業中、落盤事故などによって溝口の岸本昌氏、山口正夫氏が犠牲者になるなど、いたましい事故もあったが、未完のうちに終戦となってそのまま放置された。	